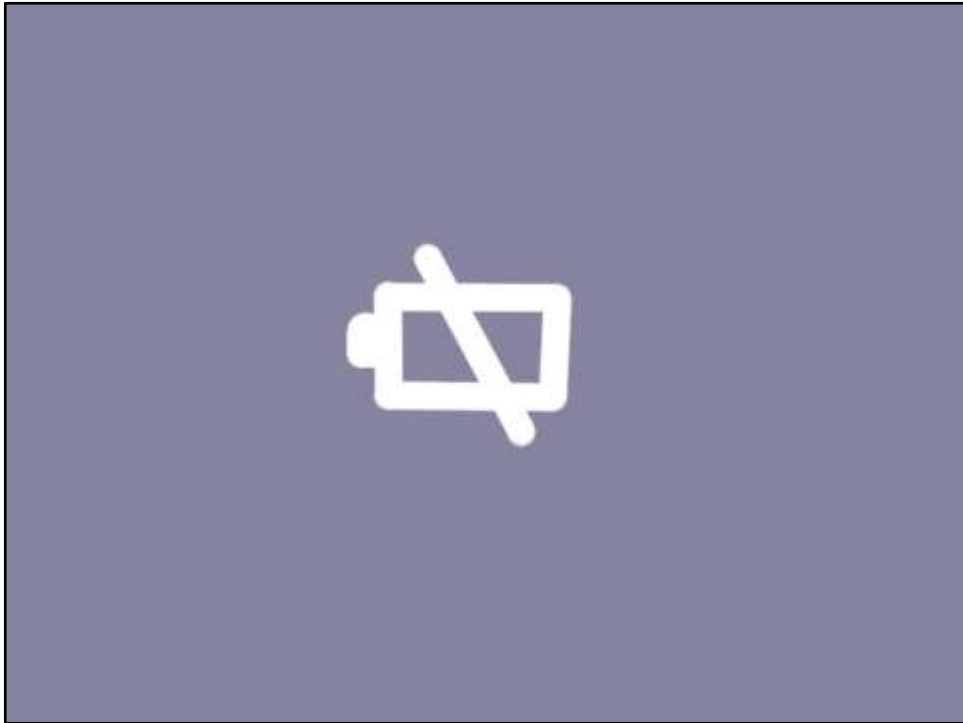






「ねえ、今どこなの」
「それが分かんないんだ、福島はどこかだとおもうんだけど」
「なにか目印ないの」
「それが、真っ白で…あっ携帯の電池きれそう」
「周りに家ない。助けてくれる人いない…ツーツーツー」



「きれちゃった。……大丈夫かなあ」

「全然、車動かないみたいね。もう最初に電話があって8時間ぐらいになるんじゃないの」

「ガソリンだいじょうぶかなあ」

「ガソリンより体よ。持病の糖尿が悪化しないといいけど」

「インシュリン届けようか？」

「何いってんの、この雪の中、どうやって行くわけ。あんたまで雪に閉じ込められちゃうよ。だいたい場所がわかんないでしょ」

「でっ……でも」

「大丈夫、きっと助けに行ってくれるよ」



配達を終え、郡山に帰ろうとしているときでした。

朝方から雪が降り続いていました。雪国育ちのわたしです。何てことはない車を走らせていたのです。しかしその日の雪は尋常ではありません。あっという間に道路は真っ白、目に見えて雪が積もっていきます。しだいに車の動きは鈍くなり遂には動かなくなってしまったのです。

車が動かなくなって10時間、車の列は微動だにしません。目の前の黒い車は雪で真白です。

「腹減ったなあ。なんにも食うもんないし…こんなことならさっきのコンビニで弁当かっつくんだったなあ」

「そうだなあ。お前、なんか持ってねえか」

「ねえよ、ガムがあるだけだ」



「はっ。寝てしまっていた」

どのくらい寝ていたのだろうと時計をみると夜の二時、1時間近く寝ていたのです。

「この寒い中、よく寝れんな」

「寝てないのか」

「寝れるわけないだろ」

「少しエンジンかけっか」

「やめとけ、いつ動くかわかんねえし、我慢できるうちは我慢しようぜ」

周りの車もバッテリーがあがるのを恐れエンジンをきったのでしょ。ずいぶん前からテールランプは消えたままです。



「まいったなあ」

「どうしただ」

「時間なんだ」

「時間ってなんの？」

「インシュリンを打つ時間だ」

「そうか、糖尿だったよなあ。大丈夫か」

「まあ 1日ぐらいは何ともねえが。でもまいったなあ」

糖尿病の私は定期的にインシュリンを打たねばなりません。予定の時間を大幅にすぎましたが、どうしようもできません。

車が動かなくなって 24時間、腹は減るし、寒いし眠い、閉じ込められてはじめて「死」を意識したのです。



仮設住民1「すごい雪だなあ。どんどん積もるわー」

仮設住民2「前の道路、見るみる間に雪が積もったなあ。飯館も降ってペなー」

仮設住民1「車も雪で埋まっちゃって、あの中の人どうしてんだべ」

仮設住民3「腹へってねべが」

仮設住民1「女の方はトイレ困っペな」



仮設住民2「だったらよお。車の中の人って食うもんもなくて困ってんだろうな」

仮設住民1「3年前を思い出すなあ。あんどきも雪だったよな」

仮設住民2「直ぐのときには、どうしていいか分かんなくて集会所でじっとしてたよな」

仮設住民1「そうだあ」

仮設住民2「おら達、自分たちでおにぎりの炊き出しやったよな」



仮設住民1「おお、かあちゃん米たけ米」

仮設住民3「米って」

仮設住民1「炊き出しだ。炊き出しすっど。みんな集めるだ。3年間の恩返しだ！」

仮設住民3「わっわかった」

仮設住民1「おめえ隣の元さんや重さんに頼んでくれ」

仮設住民3「わかった。行ってくる」



仮設住民2「炊き出しするんだって」

仮設住民3「そうだあ、たのむぞ」

仮設住民2「支援された米あったよな」

仮設住民3「あーあるある」

仮設住民1「ほんじゃ、それで炊き出しすっぺ。お昼に間に合うようにおにぎり作っぺ。」

仮設住民3「わっわかった」

仮設住民1「手が足りねえな。何人かに頼んで急ぐべ」

仮設住民3「おーいそこで雪かきしてる人ちょっと来て手伝って」

仮設住民1「何個ぐらい作ればいい？米45kg位あつから300個位出来っかな」

仮設住民4「ほら家にあったおり、梅干し差し入れだ」

仮設住民3「おにぎりさめね様に発砲スチロールの箱に入れて持ってぐべ」



コンコン、コンコン

運転手1「はっ、だっだれ？」

仮設住民1「大丈夫ですか。おにぎりつくったんだげんと、食べて下さい」

運転手1「あっ、ありがとうございます。一ついくらですか」

仮設住民1「お金なんていんねよ。こまったときはお互い様だから、遠慮なく食べてください」

運転手1「ありがとうございます。実をいうと車が動かなくなって丸いちにち何もくってなかったもので…助かります」

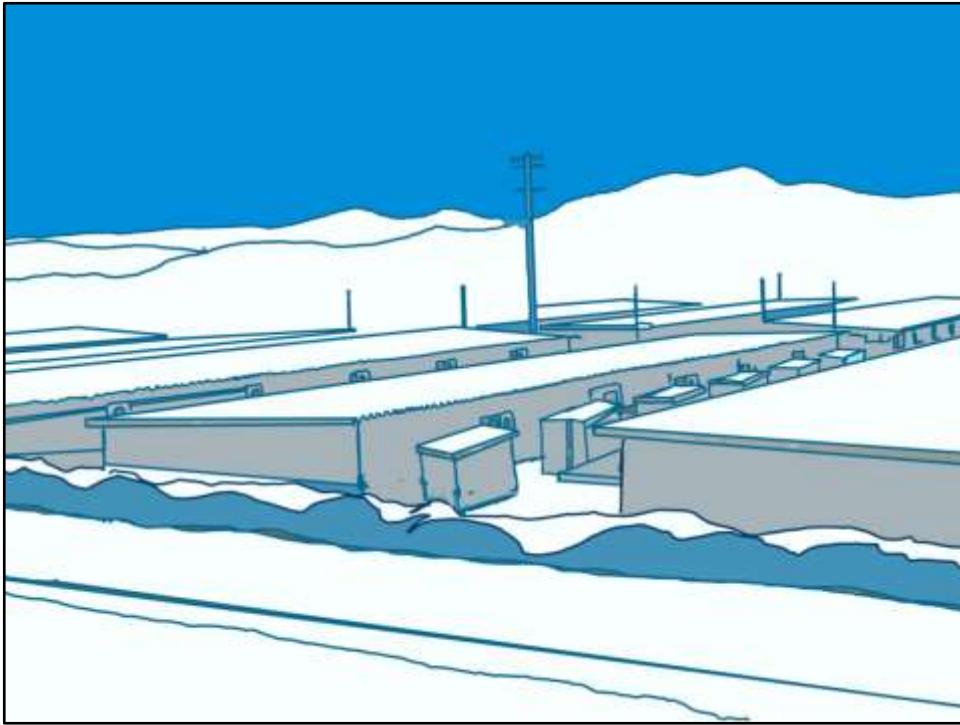


運転手1「ありがとうございます。温かいおにぎり最高です」

運転手の子供「うん、おばちゃんありがとう」

運転手1「うれしいなあ。ところで皆さん、この辺の方ですか」

仮設住民1「この辺の者じゃあねえんだげんとも。すぐ近くの仮設にお世話になって
る
んです」



運転手1「仮設って・・・被災者の方です？」

仮設住民1「そうです。飯館から避難してきています」

運転手1「ええっ、そんなかたからのおにぎり、そりゃ申し訳なくってもらえません」

仮設住民1「いいんですよ。オラたちあんときから、お世話になりっぱなしだ。ありがとうございますと頭ばかり下げてきました。そんなオラたちがちっとでも人様のお役に立てると思うと嬉しくってね。恩返しができるって仮説のみんな大張りきです。お願いですからもらってください」

運転手1「ありがとうございます。ありがとうございます」

」



どん

仮設住民3「「きゃあ」

仮設住民1「どっどうした？」

仮設住民3「足、すべっちまった。でもおにぎり落とさなかったよ」

運転手1「大丈夫ですか」

仮設住民1「重ちゃんは、いつもドジばっかなんだから。でも大丈夫だよな」

仮設住民3「私は大丈夫、だけんじよ。副会長さんの持ってあげて、あっちにいっから」



運転手「大丈夫ですか」

副会長「ああ大丈夫だあ」

運転手「俺持ちますよ。かしてください。」

運転手「うっ。お重たい。こんな重いのを運んでくれたんですか」

副会長「10kgぐらいだろ最初は軽いと思ったんだけんど。ずっと持っているとながら手がしびれてきてなあ。オラも年だあ」

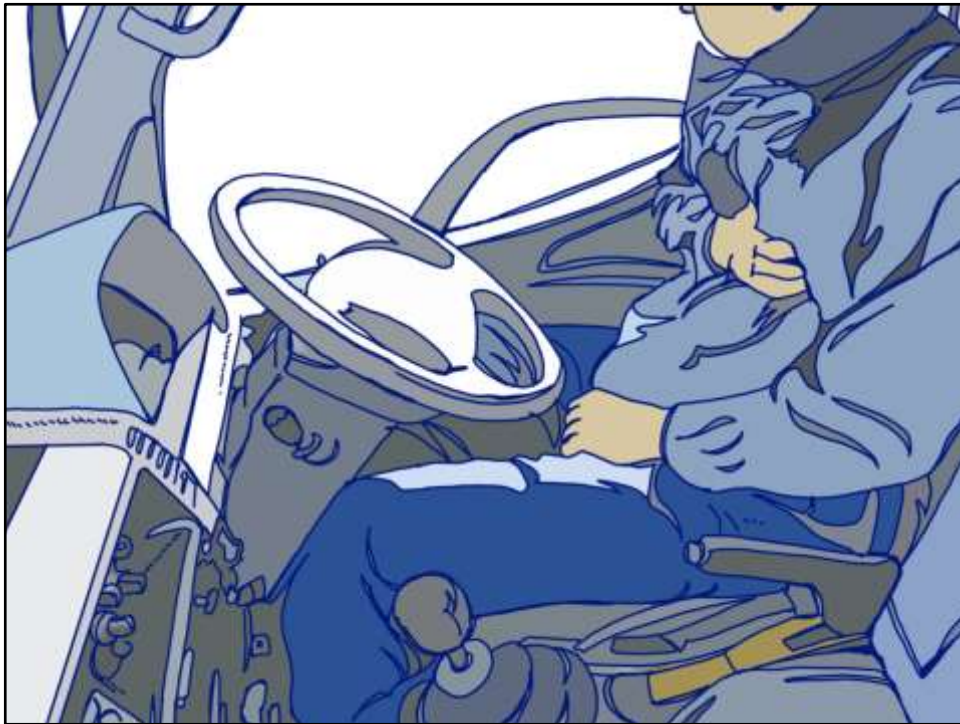
運転手「年って何歳なんです」

副会長「82だあ」

運転手「82で、この重たいおむすびを…ありがとうございます。ありがとうございます。おれ配るの手伝わしてください」



運転手2「そうだ、配るのは俺達がやるから、任せてくれ」
仮設住民3「大丈夫だよ。おらたちでやっから」
運転手1「僕たちも車の中にいるだけだから、やらしてください」
仮設住民3「ありがとうね」
運転手1「命の恩人のじちゃんにありがとうなんて言われるとこまっけど」
仮設住民3「命の恩人なんてオーバーだな。たかがおにぎりだで」



運転手2「おーい来てくれ」

仮設住民1「どうした」

運転手2「連れの様子がおかしんです。さっきからぐったりして何もこたえないんです」

仮設住民1「病気か」

運転手2「糖尿があって、定期的にインシュリンを打たないといけないみたいで」

仮設住民1「大変だ。早く病院につれていかねえと」

運転手 「大丈夫です。おにぎりを食べたら元気になりました。いやーこのおにぎりは

私の命を助けてくれました。本当にありがとうございます。ありがとう」



ブブーン、ブオーン

仮設住民1「やっと動き始めたみてえだな」

仮設住民2「丸二日、よくみんな辛抱したなあ」

プップー

仮設住民3「おーい、皆あ外みてみろ」



運転手1「ありがとうございます」

運転手2「ムスビうまかったでーす」

運転手3「皆さん、いちにちも早い復興ねがってまーす」

運転手4「ばっちゃんありがとう。お礼にまたくっからね。それまで元気でね」

窓から手を振り立ち去る車の列を炊き出しをした人々はずがしい気分で見おくるの
でした。